

# 山口たかよ

（平成二十九年三月号）

不吉なる予感は曇った空のせい鳥の鳴き声止まぬ大晦日

春の陽は柔らかなのでずっとずっと逃げ込みやさしく眠っていたい

まな板に春の光が差していて蛇口をひねれば小川のようにです

うたた寝から目醒めてみれば午後六時は白夜のように明るく冷たい

静かなる夜明けのような光だね春はいつでも希望がある

人体の中心線に立ちながら苦しい午後は瞼を閉じる

薬など飲まずに貪り深く眠り夢見ることを夢にみている

自転車溶け出しそうな夕焼けの翳の中にて人が微笑む



## ●作者の言葉

15年、母の癌手術から始まり父の胃癌による闘病、他界。悲しくて仕方なかったけれど「さあ、今年を頑張ろう」

と思った矢先の4月5日に母の緊急入院。退院は出来たけれど、私は毎日を慌ただしく過ごしています。大変なこと続きで現実の世界へひよいと

連れ戻されたような、まるでピーターパンの自分が大人になって生活している感覚の中、今日も郵便を取りに行くと、心の花からの葉書がありました。喜びの叫び声を受けながら母の所へ行くと、ものすごく喜んでくれ私は何倍にも嬉しかった。

## ●選者の言葉

山口たかよの作品には、明と暗、否定と肯定といった相反する要素が、不思議な調和の中に共存する。一首目。曇り空のどこかで鳴き止まぬ鳥の声を、不吉と捉える感覚に注目する。しかも大晦日であるという。二首目。春の光の柔らかさは救済を暗示するが、それがごくはかない希いであること、心のどこかで作者は既に知っている。三首目の、春の蛇口から輝きながらほとばしる飲びの水は、すなわち悲しみの総量でもある。この世の手触りは、白夜のように明るく、そして冷たい。この、ナイーブで痛々しい光の、諦観とも言うべき優しさと残酷さが、作者の世界であると言える。その敬虔な微光は、現実への予感と畏れと祈りに満ちたパロック世界を思わせる。